

# 中経

論壇

経営支援NPOクラブ監事

吉田 仁



「のさり」とは、天草地方に伝わる、天からの授かりものを意味する古い漁師言葉であることを、武藏野美術大学の若杉浩一教授のフェイブルックで知った。天草出身の若杉氏は、昔ながらの美しい風景や、道を譲りあう住民の所作に、今も息づく「のさり」の心を感じているとい

氏は、スチール家具を扱う大手企業において、社内の反感を買いながら木製家具の開発にこだわり、日本全国スギダラケ俱乐部を組織すると

いう異色の社員であった。本欄で何度か紹介した「屋台大学」の主宰者でもある。デザイン部門の社員研修のために、専門家を招いたアフターファイブの自主活動を社会に開放し、8年を経た今も続いている。(コロナ下でオンライン開催になつたが)そこに招かれた講師のプロフィールが、すなわち若杉氏の考え方・生き方を示している。講師の話の内容が、氏の考えを代弁しており、働くことの意味、生きてることの意味を独自の視点で深く掘り下げてこられたことがわかる。

天草に息づく「のさり」の心 大学に移られてからは、専門のデザインを通して、地域のデ

活動を積極的に行っている。学生の創造性を関心を持ってきた。ユネスコ無形文化遺産への登録は、一つのきっかけと思ってい

連携により、新しいモノづくりに取り組んでいるのだ。木・土・竹・紙という自然素材をデザイン化して作品を生み出してきた。この秋には、大学としてシンクタンクとタイアップし、「主体的・自律で継承する人を育てること」が必要で、若者のコミュニケーションが前提となる。ユネスコ無形文化遺産への登録を契機に、地域を元気にするため、行政が予算措置を含めた対策をとつてほしいものである。

地方創生の分野にも広がってほしいと思う。こうした対策を具体的に進める上で、若杉教授のこれから働きに期待をしたい。

私は、地域社会の衰えを大切にしている「のさりの人との温もりある触れ合い」が、地方に笑顔をもたらしてくれる信じるからである。

# 老若のコミュニケーションが大切